

## 態度構造と変容(Ⅱ)

### — 一貫性理論と総和理論に関する概観 —

田 中 国 夫

はじめに

#### 1. 一貫性理論

- 1-1 Heider のバランス理論
- 1-2 Newcomb の A-B-X モデル
- 1-3 Festinger の認知的不協和理論
- 1-4 Abelson と Rosenberg
- 1-5 Rosenberg の感情—認知の一貫性理論  
(以上前号目次)
- 1-6 McGuire の論理—感情の一貫性理論
- 1-7 Osgood と Tannenbaum の適合性の理論
- 1-8 Rokeach の信念適合性の理論

#### 2. 総和理論

- 2-1 Fishbein の総和理論

#### 3. 一貫性理論と総和理論の相剋

おわりに

参考文献

#### 1-6 McGuire の論理—感情の一貫性理論 (二つの仮定)

McGuire<sup>49,50,51</sup>による論理—感情の一貫性理論は、二つの仮定すなわち論理的思考 (logical thinking) と希望的思考 (wishful thinking) に基づいている。論理的思考は、個人の信念あるいは期待が、形式的論理のルールに従って関連づけられる傾向がある、と仮定する。一方、希望的思考は個人の信念が欲望や願望と一致するような傾向がある、と仮定する。これら二つの仮定は、ともにいくらかの個人の信念間に存在する関係を説明する手助けとなる。

McGuireによると、個人の信念は、個人が賛成したり、反対したりすることができ一連の主張に対して潜在的に向っている。現に McGuire は四十八の主張によって表わされる信念システムの

部分や側面を研究している。被験者は、それぞれの主張を百点尺度で正しいという確率でもって評定する。また五点尺度でそれぞれの主張の望ましさを評定する。このようにして信念の強さの測定と望ましさの量が得られる。

(Socratic Effect)

McGuire によると、個人の信念は完全に一致した関係にはなく、希望的思考のような種々の傾向によって歪められうる。しかしながら、もしいくつかの不一致な信念が、一緒に引き出されたならば、そこで個人はその不一致に気づき、論理的—一貫性の程度がより大きくなるように個人の信念を変化させる。この変化は、認知的—一貫性に向う傾向の結果生じる。McGuire は、不一致な信念が引き出された後にすぐに、論理的—一貫性の程度が増す方向に向う運動の全過程を Socratic Effect と呼んだ。

もし説得的コミュニケーションが特定の信念に変化を生じさせたならば、そこで論理的に関連する信念もまた論理的—一貫性を維持するために変化させる。たとえば論理的関連の薄い信念が、コミュニケーションで述べられなかったとしても、この効果は起りうる。しかしながら、認知的慣性 (inertia) 仮定に基づくと、この予測はいくらか変更される。認知的慣性の存在によって McGuire はつぎのように述べる。つまり、関連の薄い信念の変化量は、完全な一貫性を論理的に必要とする信念の変化量ほど多くはないであろうと。そしてさらに、関連の薄い信念に関する変化はすぐには起こらずに、徐々に時間をかけて変化するだろうと。コミュニケーションによって影響される標的信念ほど関連の薄い信念は変化せずまた変化も遅い。こうした変化は惰性の結果生じる。

(注) 本論文は広島大学教育学部、大学院修士課程学生、藤原武弘 (本学昭和44年卒) との共同研究によるものである。

(論理と確率)

上述した考察には、論理的一貫性の量的な程度が含まれており、論理的一貫性は伝統的、一般的には、定量的あるいは全か無か(二つの信念がもし関連があるなら一致しているのか、あるいは、不一致なのか)と考えられていた。しかし McGuire は、そうした問題を公式的論理の側面と確率理論の側面とを結合することにより巧妙に取り扱っている。

$$(a \cap b) \cup k \rightarrow c \quad ①$$

これはもし a と b あるいは k が正しかったならば、そこで c が論理的に帰結される、ということの意味する。McGuire<sup>51)</sup>によると、公式の記号はつぎのようにして説明される (P. 68)。

- a. 大きな核戦争が起こると少なくとも地球人口の半分は死ぬだろう。
- b. 大きな核戦争はここ十年以内に起こるかもしれない。
- k. 核戦争以外の原因でここ二十年内に少なくとも地球人口の半分は死ぬかもしれない。
- c. 少なくとも地球人口の半分はここ十年内に死にみまわれるかもしれない。

この論理的表現は、確率の加算的、乗法的法則の点から変更される。乗法的法則によると、二つの独立な事象が起こりうる確率は、それぞれ別の確率の積に等しい。加算的法則によると、二つの相互に背反し合う事象のどちらかが起こりうる確率は、それぞれ別の確率の合計に等しい。a と b との相互依存 (a ∩ b) と k との相互背反のようないくらかの仮定を作ることによって McGuire<sup>51)</sup> はつぎのような方程式に表わす (P. 105)。

$$P'(c) = P(a)P(b) + P(k) \quad ②$$

この式は、c が正しいと予測された確率は、a と b とが正しいという確率の積と k が正しいという確率を加えたものに等しい、ということの意味している。

(P(k)の困難さと変化の方程式)

方程式②についての最大の問題とは、P(k)を測定するということと、a と b とは c を意味するという以外に、その他の主張や信念がありそうであるということである。上述した例で説明するともし「大きな核戦争が起こると地球人口の半分は死ぬだろう」という主張 a の確率評定と「大きな

核戦争がここ十年内に起こるかもしれない」という主張 b の確率評定がわかるならば、そこで「少なくとも地球人口の半分はここ十年内に死にみまわれるかもしれない」という帰結は、a と b との別々の確率の積と同じあるいはそれ以上の確率評価が与えられるであろう、と予測される。

$$P'(c) \geq P(a)P(b), \text{ McGuire, }^{51} \text{ P. 69}$$

しかしながら、c に与えられうる確率評価は正確には予測しえない。なぜなら、P(k)を測定することが困難であり、不可能であるからである。McGuire は P(k)を測定するための三つの可能な方法を考えているけれど、どれも十分に満足ではない。従って彼は P(k)の値を無視している。この点に関しては、Rosenberg<sup>79)</sup>によっても批判されている。

McGuire は、さらに a と b との両方の確率についての変化に従って、帰結の確率の予測された変化を記述するためにつぎのような等式を提出する (P. 70)。

$$\begin{aligned} \Delta P(c) &= \Delta P(a)P(b) + \Delta P(b)P(a) \\ &\quad - \Delta P(a)\Delta P(b) \end{aligned} \quad ③$$

この等式において、P(a)とP(b)とは変化する前の最初の信念を示しており、ΔP(a)とΔP(b)とは、a と b における変化を示し、ΔP(c)は c において予測した変化を示している。この等式から論理的一貫性に必要な変化量に関して正確な予測が可能である。もし P(a)が実験的に取り扱われ P(b)が取り扱われずに、P(b)がほんのわずかしかならば、等式③の最後の二つの項目 ΔP(b)P(a)と ΔP(a)ΔP(b)は消える。

1-7 Osgood と Tannenbaum の適合性の理論 (態度測定)

Osgood, Suci と Tannenbaum<sup>62)</sup>は、SD法 (Semantic Differential 法)として知られているテクニックを発展することにより、意味の理論と測定の研究に従事してきた。七段階の評定尺度 (反対語の対)でもって、異なった被験者が、異なった概念に対して、異なった方法で判断した結果を因子分析にかけることにより、Osgood et al.<sup>62)</sup>は、三つの一般的な意味の因子(評価因子、力量因子、活動性因子)を見い出した。これら三つの意味次元を主軸として意味空間が成立してい

る、と Osgood et al. は仮定する。評価因子は、意味の持つ態度的側面と同じものと考えられ、良い—悪い、愉快的—不愉快的、肯定的—否定的などの尺度で特徴づけられる。力量因子は、評価と直交するものであり、強い—弱い、重い—軽い、柔らかい—固いなどの尺度で特徴づけられる。活動性因子は、速い—遅い、積極的—消極的、興奮しやすい—冷静なような尺度で特徴づけられる。従って、Osgood と Tannenbaum<sup>63)</sup> による態度変容の予測に関する研究は、ある意味では、意味の測定研究の副産物であるといえる。

社会心理学のテキストブックを繙いてみるならば、態度とは、感情的要素、認知的要素、行動的要素の三つから成り立っていると述べられている。Osgood et al. によって発展せられた SD 法は、態度に含まれた感情的要素の測定を可能にする一方法である。Osgood et al.<sup>62)</sup> は態度をつぎのように定義している。

「セマンティック・ディファレンシャルによる測定の操作という点から見ると、われわれは、ある概念の意味を多次元的な意味空間のある点に位置するものとして定義する。そこでわれわれは、ある概念に対する態度を、その空間の評価的次元上に投影されたものと定義する。」(P. 190)

さらに Osgood et al. は、セマンティック・ディファレンシャルの評価的次元が、態度の指標として信頼性と妥当性を兼ね備えていることを検証している。ここで留意すべき点は、同じようにニグロに対して等く否定的な態度の二人の人間がいたとしても、一人はニグロを強く、積極的であると考えているかもしれないが、他の人はニグロを弱く、消極的なものと考えている点では異なっているかもしれない。つまり、ある概念に対して同じ態度を持っていたとしても、意味空間の次元に関しては厳しく区別されるのである。

#### (適合性の原理)

Osgood と Tannenbaum<sup>63)</sup> は、人間思考における適合性の原理をつぎのように定義する。

「評価における変化は、その時に存在している準拠枠 (frame of reference) との適合性を増加する方向に常に向う。」

態度は、肯定的にか、否定的にか、どちらかに最大に分極化 (polarization) する傾向があるので

異なった評価 (evaluation) の二つの態度対象が主張 (assertion) を通じて結合される場合、それぞれの対象の評価に関して、均衡あるいは適合の点に位置を変える。彼らのいう理論的モデルを図式化するとつぎようになる。

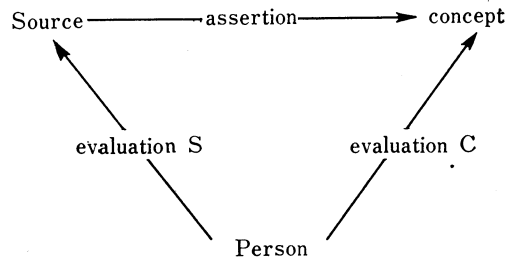


図 9

適合性の原理が働くためには、二つの判断対象 (source と concept) が、主張を媒介として結合されねばならない。主張は二つの型に分類される。関連的 (associative) な主張と分離的 (dissociative) な主張とである。関連的な主張とは、A は B である、A は B を愛している、A は B と握手をする、といった形で示される。分離的な主張とは、A は B ではない、A は B を嫌っている、A は B を避ける、といったステイメントで示される。そして Osgood et al.<sup>62)</sup> は、主張の形態をつぎの四つに分類している。

1. 簡単な言語の修飾
2. 簡単な知覚的接触 (contiguity)
3. 分類のステイメント
4. source-object 主張

しかしながら、主張の明確な定義はなされていない。この点は問題点の一つである。

#### (適合性原理の論理的展開)

1. ある判断対象が主張によって他の判断対象と結合する時にはいつでも、評価次元にそって適合する位置は、常に他の判断対象への分極の程度 (d) に等しい。適合の位置は、同じ (肯定的な主張) か、あるいは、その反対 (否定的な主張) の評価的方向のどちらかに等しい。(Osgood と Tannenbaum<sup>63)</sup>)

判断対象  $OJ_1$  に対する態度の分極の程度は、 $d_{OJ_1}$ 、同様に  $OJ_2$  については  $d_{OJ_2}$  となる。

このような判断対象は、+3から-3の七段階にわたってセマンティック・ディファレンシャル尺度の評価的次元に位置する。もし肯定的な主張を通じて  $OJ_1$  と  $OJ_2$  が関係づけられたならば ( $OJ_1A^+OJ_2$ )、あるいは否定的な主張を通じて両対象が関係づけられたならば ( $OJ_1A^-OJ_2$ )、どちらかの判断対象の適合点 (c) をつぎのように定義する。(Osgood と Tannenbaum<sup>63)</sup>)

もし  $OJ_1A^+OJ_2$  ならば

$$d_{COJ_1} = d_{OJ_2} \quad \text{①}$$

$$d_{COJ_2} = d_{OJ_1} \quad \text{②}$$

もし  $OJ_1A^-OJ_2$  ならば

$$d_{COJ_1} = -d_{OJ_2} \quad \text{③}$$

$$d_{COJ_2} = -d_{OJ_1} \quad \text{④}$$

2. 主張によって他の判断対象と関係づけられたある特定の判断対象に関する適合への有効的な全圧力 (P) は、態度尺度単位において、評価的次元にそったもとの位置と最大の適合の位置との間の差に等しい。適合の位置がもとの位置よりも好意的である時には、この圧力のサインは肯定的 (+) であり、適合の位置がもとの位置よりも非好意的である時には、圧力のサインは否定的 (-) である。

すなわち

$$POJ_1 = d_{COJ_1} - d_{OJ_1} \quad \text{⑤}$$

$$POJ_2 = d_{COJ_2} - d_{OJ_2} \quad \text{⑥}$$

それ故、①式から④式でもって置き換えると

もし  $OJ_1A^+OJ_2$  ならば

$$POJ_1 = d_{OJ_2} - d_{OJ_1} \quad \text{⑦}$$

$$POJ_2 = d_{OJ_1} - d_{OJ_2} \quad \text{⑧}$$

もし  $OJ_1A^-OJ_2$  ならば

$$POJ_1 = -d_{OJ_2} - d_{OJ_1} \quad \text{⑨}$$

$$POJ_2 = -d_{OJ_1} - d_{OJ_2} \quad \text{⑩}$$

⑦式から⑩式の方程式から生じるサインは、それで P の方向を示している。

3. 態度変容が起こる観点から見ると、適合に向う全圧力は、主張によって関連づけられた判断対象の間で、それぞれの分極の程度と逆比例して分配される。

比較的より分極化が少ない判断対象が、比較的分極化のより多い判断対象と関連した時には、適合に向う圧力の量は比例して大きくなり、従って変化も大きくなる。この原理を適用することによ

り、つぎのような公式ができる。これにより相対的な態度変容を予測することが可能である。

$$AC_{OJ_1} = \frac{|d_{OJ_2}|}{|d_{OJ_1}| + |d_{OJ_2}|} POJ_1 \quad \text{⑪}$$

$$AC_{OJ_2} = \frac{|d_{OJ_1}|}{|d_{OJ_1}| + |d_{OJ_2}|} POJ_2 \quad \text{⑫}$$

この式で AC は態度変容を示しており、 $d_{OJ_1}$  と  $d_{OJ_2}$  は、サインに関係のない絶対値で表わされており、 $POJ_1$  と  $POJ_2$  は、方程式⑦から⑩により決定される。

さて主張が肯定的な場合における source と concept に対する最初の態度から、すべての組合わせについて態度変容の予測を公式⑫を適用することにより計算してみると表 2 のごとくなる。注目すべきことは、予測された変化が、source に対する最初の態度とは変わっていないということである。(右上と左下の直線で囲まれた部分)

表 2

source と concept の両方の最初の位置の関数としての concept に関する予測された態度変化—肯定的な主張 (不信頼のための修正はない)

source に対する最初の態度	concept に対する最初の態度						
	+3	+2	+1	0	-1	-2	-3
+3	0.0	+0.6	+1.5	+3.0	+3.0	+3.0	+3.0
+2	-0.4	0.0	+0.7	+2.0	+2.0	+2.0	+2.0
+1	-0.5	-0.3	0.0	+1.0	+1.0	+1.0	+1.0
0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
-1	-1.0	-1.0	-1.0	-1.0	0.0	+0.3	+0.5
-2	-2.0	-2.0	-2.0	-2.0	-0.7	0.0	+0.4
-3	-3.0	-3.0	-3.0	-3.0	-1.5	-0.6	0.0

この予測は、受け手側がメッセージを完全に信頼している、と仮定している。しかし、アイゼンハワー (+3) が共産主義を賞賛するといったメッセージが提示された時には、被験者はその情報を信用するだろうか? こうした点を考慮するならば、予測を行なう際には信頼の変数を考慮しなければならない。

4. ある判断対象が主張によってもう一つの判断対象と関連づけられる時に生み出される不信頼の量は、不適合量の肯定的に促進された関数である。その関数は、態度変化を減ずるように存在し、働くもので、最大の時には変化を完全に削除する。

逆に評価された判断対象が、肯定的な主張によって関連づけられた時のみならず(表2の右上と左下のコーナー)、評価において非常に似ている判断対象が、否定的な主張によって関連づけられた時にも不信頼は存在すると考えられる。不信頼のための修正量は、不適合の程度とともに増加する。図10は、不信頼のための修正を扱った図解である。最初のカーブが中立の点からむこうは水平になっており、表2の右上のコーナーから引き出されたもので source(OJ<sub>1</sub>) に対する三段階の最初の態度を示している。点線は仮定された不信感を表わしており、適合に向う全圧力の肯定的に促進された関数である。もちろん、この関数の形は純粋な直感に基づいているもので、たぶん修正されねばならない。細い実線のカーブは、予測された態度変化から不信頼関数を引いた結果を表わしている。同様のことが表2の左下のコーナーについてもいえる。不信頼の場合には、態度変化を予測する公式はつぎのようになる。

$$AC_s = \frac{|d_c|}{|d_s| + |d_c|} P_s \pm i \quad (13)$$

$$AC_c = \frac{|d_s|}{|d_s| + |d_c|} P_c \pm i \quad (14)$$

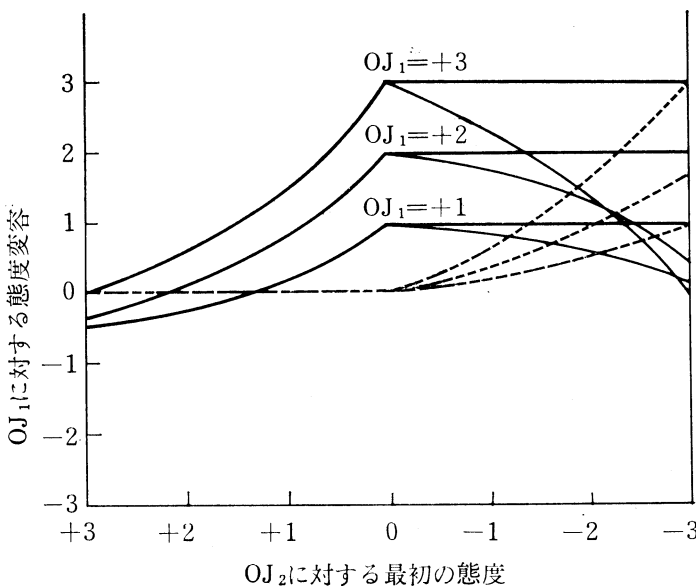


図 10

OJ<sub>2</sub> に対する 態度における 予測された変化と不信頼のための修正 (仮定された不信頼は点線によって示されている)

ここで二番目の要素のサイン(i=不信頼のための修正)は、いつも第一番目の要素(P)のサインと逆であり、効果を減少するように働く。sとcという記号は、それぞれ source と concept を示している。注意すべき点は公式(13)と(14)は、不信頼の場合にだけ適用され、信頼できる場合にはi=0という具合に考えねばならない。i関数の正確な性質は、実験的に決定されねばならぬが、Osgood と Tannenbaum は、関数  $i = a(d_s^2 + b)(d_c^2 + d_c)$  に近い、と述べている。そこで定数 a と b とは、それぞれ 1/40 と 1 である。従って  $i = f(d_s, d_c)$  であるということは明らかで、態度変容はやはり、二つの分極の程度の関係であり、主張の方向は関数である。

適合性のモデルによると source と concept との両方の変化は、主張を通じて連合された結果生じる。しかし、特別な source-concept の場合においては、一つの付加的な要因を考慮しなければならない。すなわち、一般的には、source よりもむしろ concept の方が影響を受けやすいということである。たとえば、XがYを賞賛する時には「賞賛する」という好意的な結果は、主にYにあてはまるということである。従って、concept に対する態度変化を予測する場合には、主張のサインと常に同じである定数(±A)を方程式につけ加えねばならない。

なお、関連的主張のみで二つの判断対象が結合される際には、適合の点はつぎのような公式で示される。(Osgood et al. 62, P. 207)

$$P_R = \frac{|P_1|}{|P_1| + |P_2|} P_1 + \frac{|P_2|}{|P_1| + |P_2|} P_2$$

適合性理論に関する検証実験として Tannenbaum<sup>88,89)</sup>, Kerrick<sup>42,43,44)</sup>, Tannenbaum と Gengel<sup>90)</sup>, Janicki<sup>38)</sup>, Stackowiak と Moss<sup>85)</sup> や、わが国では瀬谷<sup>83)</sup> の研究があげられる。瀬谷<sup>83)</sup> の研究を除くと上述した研究は、いずれも適合性理論を検証している。しかしながら、

最近になって、Triandis と Fishbein<sup>92)</sup>、Fishbein と Hunter<sup>29)</sup>らによって、適合性理論に疑問が投げかけられている。彼らの批判点とは、二つの概念が結合した時には、適合の点は二つの概念の平均であるか、総和 (summation) であるか、という点である。Triandis と Fishbein<sup>92)</sup>の研究では、「あなたと宗教を異にするニグロのポルトガル人」といった合成要素に関する評価を、その構成要素 (宗教を異にする、ニグロなど) の評価から予測する際には、合成的要素の平均になるか、あるいは総和になるか、といった問題を扱っている。彼らの研究の結果を見ると、平均 (適合性) 理論よりもむしろ総和理論の方を強く支持している。なおこの問題については、後で詳細に述べる。

問題点をもう一つあげるなら、Osgood と Tannenbaum の適合性理論の数学的モデル式が、二つの特別な修正すなわち不信頼修正と主張の定数を含むことである。これらの修正のうちのどちらも、適合性の原理から生じたものではなく、モデル式と実際に得られたデータとが合致するように導入されたきらいがある。従って、Osgood と Tannenbaum<sup>63)</sup>によると、予測値と実際値との相関係数は .91 と高いけれど、予測値と実際値とを合わせるためにとりつくろわれた修正のように思えるのである。

しかしながら、他の一貫性理論と異なり、数学的なモデルを提出することで態度変化の方向と量との予測を可能にせしめ、その理論の含蓄を正確に検討することを可能にしている点で、Osgood と Tannenbaum の適合性理論は、優れていると思われる。

### 1-8 Rokeach の信念適合性の理論

信念適合性の理論 (belief congruence theory) は、Rokeach と Rothman<sup>68)</sup>によって発展せられた。理論的背景は、Rokeach<sup>67)</sup>や Rokeach, Smith と Evans<sup>69)</sup>による初期の研究をさらに洗練、拡張した結果出てきたものである。

#### (信念適合の原理)

信念適合性の原理によると、われわれは、われわれ自身の信念システムに適合する程度に応じてある一定の信念、信念のサブシステム、信念シス

テムを評価する傾向がある。さらに、人々が示した信念と適合するようにその人々を評価する傾向がある。言語的な概念、事柄のような刺激は、その刺激と関連する個人内の信念システムの部分に反応を喚起させる傾向がある。たとえば、「共産主義」といった言語的な概念は、経済、政治、戦争といったものに関連する信念に反応を喚起させるかもしれない。二つの刺激を結びつける主張 (assertion) を Osgood と Tannenbaum<sup>63)</sup>に従って Rokeach<sup>70)</sup>は、関連的と分離的に分ける。そしてその型として、1. 簡単な言語の修飾、2. 簡単な知覚的接触 (contiguity)、3. 分類のステイトメント、4. source-object 主張、に分類する。

Rokeach<sup>70)</sup>によると、characterized subject (cs) を示す認知的な布置 (configuration) は、主張の結果生ずる。cs とは、人物、観念であり、ある方法で記述されるものである。この cs は二つの要素を持つ。つまり、特徴づけられることができる subject (s) と多くの subject に適用されることができる characterization (c) とである。たとえば、「共産主義者である白人」という cs において、「白人」は subject (s) を表わし、「共産主義者」は characterization (c) を表わしている。

#### (関連性の比較)

cs が提示された時には、個人は最初二つの要素つまり c と s とが互いに関連しているか、否かを確かめる。もし個人がそれらは関連がないと判断したならば、認知的相互作用を予想する心理学的な根拠はなく、その無関連な要素は無視されることになる。すなわちそれは cs の評価にどんな影響をも及ぼさない。しかし、二つの要素が関連があると判断されたならば、重要性 (importance) と関連する二番目の判断が起こる。

#### (c と s との相対的重要性)

少なくとも部分的な関連性がある場合には、個人はつぎに s と c との相対的重要性について比較するであろう。そしてそれは、既存の信念システムによって規定される一般的な準拠枠内で判断される。布置 (configuration) cs の評価は、c と s との評価の単純平均であり、c と s は、cs の文脈内での c と s との判断された相対的重要性によって重みづけられる。Rokeach<sup>70)</sup>は、これを

つぎのような公式で表わしている。(P. 85)

$$d_{cs} = (w)d_c + (1-w)d_s \quad \text{①}$$

$d_{cs}$  = characterized subject の分極化の程度

$d_c$  = characterization の分極化の程度

$d_s$  = subject の分極化の程度

$(w) = d_s$  に対する  $d_c$  の知覚された重要性の程度

$(1-w) = d_c$  に対する  $d_s$  の知覚された重要性の程度

Insko<sup>61)</sup> は, Osgood と Tannenbaum<sup>63)</sup>, Osgood et al.<sup>62)</sup> によるモデル式との類似点と相違点をつぎのように述べる。「この公式は、二つの関係づけられた判断対象を均衡点に予測するという点で Osgood と Tannenbaum の公式に類似している。しかし、Osgood と Tannenbaum の公式においては、関係づけられた判断対象、cs の要素は、判断された相対的重要性に応じて重みづけられるのではなく、分極の程度に応じて重みづけられている。」(PP. 142-143)

(cs と c との相対的重要性)

c の重要性が百分に達する時 (そして s は 0%), c と s との比較の上に、付加的な比較つまり cs と c との相対的重要性について一層比較しなければならない。たとえば、「責任感のない父親」という文脈において、「責任感のない」を百分重要であると考える人の例について考えてみよう。そのような場合に、公式①を用いるならば、cs の評価は、完全に c の評価によって決定されるだろう。そのように仮定するならば、cs の評価は、c と s との相互作用によって、c の評価よりも大きくなる可能性が生じる。換言するならば父とは特に「無責任」であるべきでないと感じられるので、「責任感のない父親」といった場合には、「責任感のない」といった言葉よりも否定的に感じられるかもしれない。このように「over-assimilation」を考慮に入れ、Rokeach はさらに一歩進める。

cs の評価に関して、二つの比較過程 (c 対 s, cs 対 c) について結びつけられた効果はつぎのように示される。(Rokeach, <sup>70</sup> P. 86)

$$d_{cs} = d_c + (v)d_c \quad \text{②}$$

$d_{cs}$  = characterized subject の分極化の程度

$d_c$  = characterization の分極化の程度

$(v)d_c$  = 二番目の比較過程 (cs 対 c) の付加的効果

$(v) = c$  よりも cs に重要性を置く程度

なお個人が、cs と c の重要性が等しいと判断したならば、 $v=0$  で  $d_{cs} = d_c$  となる。また個人が、cs の方が c をより重要であると判断したならば、v は cs が c よりも重要であると知覚した程度を表わす率に等しい。そして  $d_{cs}$  は、(v) の値によって  $d_c$  よりも大きくなるであろう。だから  $d_c$  が肯定的な時には、 $d_{cs}$  はより肯定的になり、その反対に  $d_c$  が否定的な時には、 $d_{cs}$  はより否定的になるであろう。一つの限定されなければならぬ重要なことは、 $d_{cs}$  の値は調査で用いられている尺度の最高値 ( $\pm 3$ ,  $-3$  から  $+3$  の尺度の場合) 以上にはならない、ということである。従って、もし  $d_c$  が最高値の場合には、 $d_c + (v)d_c$  と同じ値をとることになる。

(信念適合性の原理と適合性の原理との比較)

Rokeach<sup>70)</sup> は、Osgood と Tannenbaum<sup>63)</sup> の適合性の概念との比較を通して、信念適合性理論について叙述している。(PP. 87-91)

1. 適合性の原理は、additive モデルであり、均衡点は、別々に考慮された二つの判断対象に基づいて予測される。一方、信念適合性の原理は、configurationist モデルであり、二つの要素によって形成された唯一のゲシュタルト (Gestalt) は別々に評価された知識から単に予測されえない。

2. 二つのモデルは、不適合の心理的意味についての概念化の点でも異なっている。適合性の原理によると、不適合は c と s との間に位置するが、信念適合性の原理によると、c と cs, s と cs との間に不適合が位置する。

3. 適合性理論は、overassimilation 効果を説明することができないけれど、信念適合性理論によると、それを説明することが可能である。

4. 適合性理論による予測は、主張の定数によって修正される。というのは、source-object 主張の場合に、主張の source よりもむしろ object の方が相対的により大きい変化を受けるからである。それに反して、信念適合性理論によると、相対的重要性という概念 (c と s との重みづけ) によって、そのような主張の定数は不必要である。

〔2〕 総和理論 (summation theory)

Osgood と Tannenbaum の 適合性理論のところであらう述べてのように、態度形成や変容が起こる場合に、二つの態度対象の平均の点に適合するの、あるいは総和の点に適合するの、といった

問題が存在する。こうした問題はむしろ、印象の形成に関する研究領域で論議されてきた。たとえば、Rosenberg<sup>79)</sup> は、印象形成についての総和モデルと平均モデルを図11のようにまとめている。

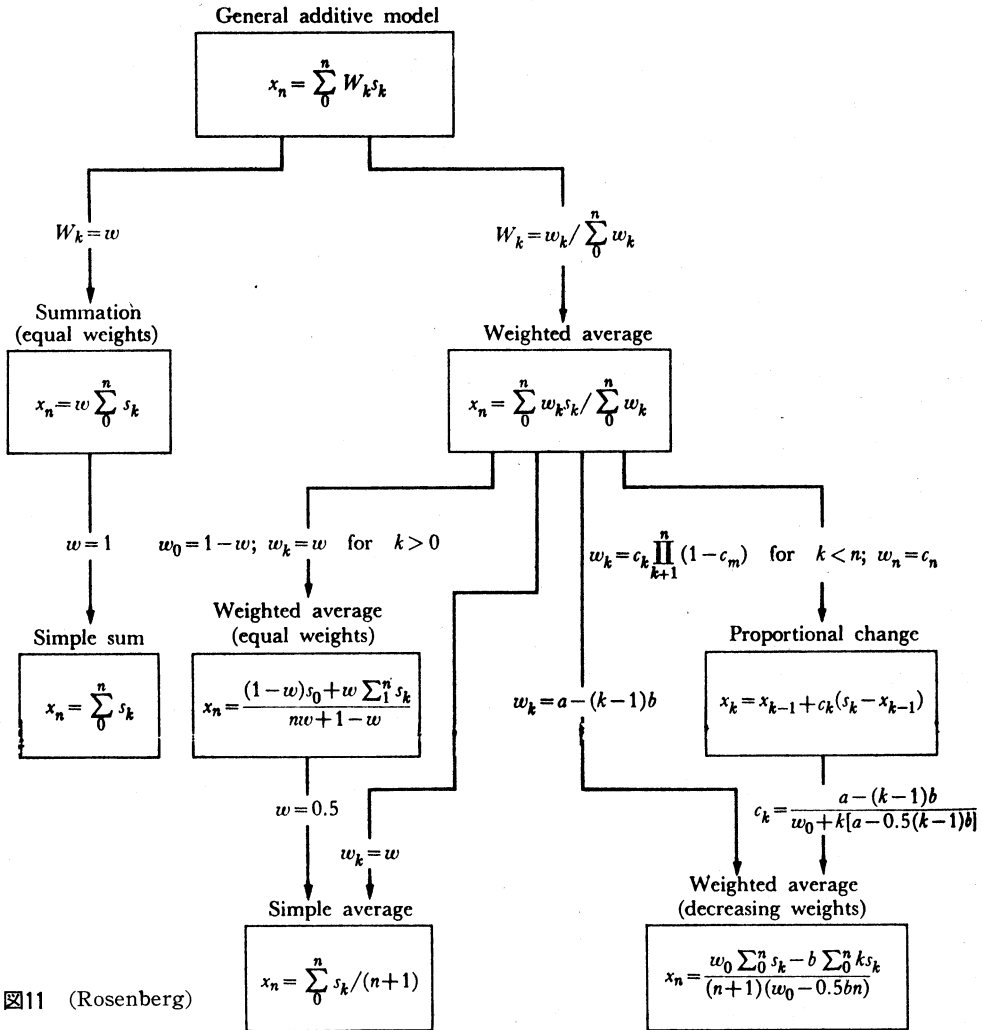


図11 (Rosenberg)

この図についての詳細な説明は行なわれないが、少なくとも 総和对平均という対比で Fishbein (Fishbein と Hunter<sup>29)</sup>, Anderson と Fishbein<sup>5)</sup> などが態度理論の文脈の中へ問題を投げかけた背景となるものである。

2-1 Fishbein の総和理論

(態度, 信念の定義)

Fishbein<sup>22)</sup> は、ある対象に関する 信念とその

対象に対する態度との関係に基づいて、態度構造と変容の理論を提出した。Fishbein<sup>23)</sup> は、その理論的核心を自分自身で要約してつぎのように叙述している。

1. 個人は、ある一定の対象に関して多くの信念を抱いている。つまり、多くの異なった特性、特質、価値、目標、対象が、一定の対象と肯定的にか、否定的にか結びついている。
2. 媒介的評価的反応つまり態度は、これら「関



係のある対象」と相互に関連する。

3. これら評価的反応は総和する。

4. 媒介過程を通じる総和した証価的反応は、態度対象と関連する。

5. 将来、態度対象は、この総和した評価的反応つまり態度を喚起させるであろう。

Fishbein はこのように、態度は感情的成分、認知的成分、行動的成分を含むといった多次元的な概念規定は行なわない。たとえば、人種差別に同じように反対している二人の間は、人種差別の特質、原因、結果について異なった意味を抱いているかもしれないし、人種差別を廃止するために行なわれている行動に関しても異なった見解を持っているかもしれない。従って、人種差別に対して同じ態度を持っているということは、人種差別について同じ信念を持っているということの意味しない。Fishbein<sup>25)</sup>によると、態度と信念はつぎのように定義される。

「態度とは、ある対象や対象の階層に対して好意的にあるいは非好意的に反応する学習された行動傾向 (predisposition) である。

一方、信念とは、それら対象の性質やタイプについての仮説である。」(P. 257)

多くの研究者達は、態度と信念との差違を吟味することなしに、一般的には態度という単一の言葉の中に種々の成分(評価、信念など)を包含して態度を定義してきた。その反面、態度尺度によって測定されているものは、単にある対象や概念についての評価(賛成—反対)だけであって、認知的、行動的要素の測定を無視するきらいがあった。概念的定義と操作的定義との間の大きなギャップをはらみながら態度理論と測定の研究がなされてきたのである。そこで Fishbein は、感情的(評価的)成分のみで態度を定義するという一次的な概念化を行なう。そして一方では、認知的成分と行動的成分とが信念を構成するものと考えられる。Fishbein は、Osgood と Tannenbaum<sup>63)</sup>、Osgood et al.<sup>62)</sup> に従って、態度を「概念についての評価的次元」として操作的定義を行なう。Osgood 流の態度概念の規定はつぎのような点で有利であると Fishbein<sup>25)</sup> は述べる。

1. 態度をある対象、概念についての評価的意味と同じであると考えることにより、一次的な概

念として扱うことができる。

2. Osgood et al.<sup>62)</sup> が指摘しているように、意味空間におけるそれぞれの点は評価的要素を持っているので(評価の判断が中立の時にはその要素は0の大きさであるけれど)ある対象について個人が、肯定的、否定的、あるいは中立的態度を持っているということがこの定義により明らかになる。

3. 態度とは、ある刺激に対して、好意的、非好意的に反応する学習された行動傾向と考えられるが、これは Osgood による行動理論的用語における態度の定義(態度とは、ある刺激と関連する評価的反応の媒介過程と考える点で)と一致する。従って、操作的には、Osgood et al.<sup>62)</sup> による SD 法によって態度は測定されうる。

Fishbein と Raven<sup>28)</sup> は、態度の定義と類似した信念の定義を行なった。すなわち、態度を「概念についての評価的次元」として定義するのに対して、信念を「概念についての確率的次元」として定義する。たとえば、個人は、ある概念について「良い」とか「悪い」とか評価するのみならずその概念が「存在している」のか、「存在していない」か、という概念の存在を信じなかったり、信じたりする。そこでこの後者の判断を「信念」と考える。このような観点に立って、Fishbein と Raven<sup>28)</sup> は、信念の測定法を発展し、これを B 尺度と名付けた。これは被験者に一連の対になっている確率的尺度(たとえば、ありそう—ありそうもない、可能—不可能な、正しい—まちがった、など)でもってある概念について評定してもらうことにより得られる。

一見すると信念についてのこの概念規定は特別なもののように思われる。つまり、対象についての存在の確率のみに関心を向けており、従来の信念の定義とは異なっているように思える。特に従来の研究者達は、対象についての信念 (belief about an object) に注意を払っており、対象の存在についての信念 (belief in an object) を無視していた。このような問題点から、Fishbein と Raven<sup>28)</sup> は信念を「対象の存在についての信念 (belief in an object)」と「対象についての信念 (belief about an object)」とに分類する。前者は、対象の存在自体に関する信念であり、後者は

その対象とその他の対象、性質との間の関係の存在についての信念である。たとえば、神の存在について信じるか否か、というのは belief in であり、神を含む関係の存在（神は全能である。神は全知である。神は子供を持っている。など）について信じるか否か、というのは belief about である。

Fishbein は、一般的には、belief about an object とは、信念の対象とその他の対象、概念、価値、目標との間に特別な関係が存在する probability あるいは improbability と定義する。この belief about an object は、(X)－(Y)のように図式化される。(X)は信念対象を示し、Yは他の対象、概念を示し、－という線は(X)と(Y)とを結び関係、主張を表わしている。本質的には、この(X)と(Y)との関係自体を信念と定義する点では従来の研究者による信念の定義と一致する。

(態度構造と変容のモデル式)

Fishbein の理論によると、ある対象に対する個人の態度とは、その対象に関するその人の信念（つまり、その対象が、その他の対象、概念、価値あるいは目標と関連する確率）とそれらの信念の評価的側面（つまり、「関連した対象」に対する態度）との関数である。代数的には、この仮説はつぎのようにして表現される。

$$A_o = \sum_{i=1}^N B_i d_i$$

$A_o$  = 対象 “O” に対する態度

$B_i$  = “O” に関する信念 “I”

つまり特別な関係が “O” とその他の対象、価値、概念あるいは目標 “ $X_i$ ” との間に存在する “probability” あるいは “improbability”

$d_i$  =  $B_i$  の評価的側面

つまり関連のある対象 “ $X_i$ ” に対する態度

$N$  = “O” についての信念の数

(Fishbein<sup>22)</sup>)

この公式について非常に興味深い点とは、価値評価と道具性の評価との積の総和に基づいて態度構造を把握する Rosenberg<sup>71,72)</sup> の仮説によく類似しているということである。Fishbein<sup>24)</sup> 自身

もこの点を認めて、代数的に Rosenberg の仮説をつぎのように表示している。

$$A_o = \sum_{i=1}^N I_i V_i$$

$A_o$  = 対象に対する態度

$I_i$  = 信念あるいは対象がある一定の価値ある状態 “i” の達成に導くか、妨げるかという確率

$V_i$  = 価値の重要性あるいは価値ある状態 “i” から予期される感情量

(Fishbein, <sup>26</sup> P. 394)

また Fishbein<sup>26)</sup> は、その他の類似理論として Smith<sup>84)</sup>, Cartwright<sup>14)</sup>, Peak<sup>64)</sup>などをあげている。多少の相違はあるせよ、本質的には、ある対象に対する個人の態度とは、その対象についての個人の信念とそれら信念の評価的側面との関数であると予測する点においては同じである。

### 〔3〕一貫性理論と総和理論との相剋

Fishbein と彼の仲間 (Triandis と Fishbein<sup>92)</sup> Fishbein と Hunter<sup>29)</sup>, Anderson と Fishbein<sup>5)</sup> Anderson と Hackman<sup>6)</sup>, Anderson<sup>7)</sup>) は、態度構造と変容の基礎となる原理として総和理論の立場に立つ研究に従事してきた。この総和理論は一貫性の原理に基づき態度構造と変容とを把握する一貫性理論とは全く異なっている。すなわち、Fishbein の態度構造と変容のモデル式から理解できるように、総和理論は、ある対象に対する個人の態度とは、その対象についての信念と関連する感情の総量の関数である、と予測する。一方これに対して、一貫性の概念に基づくたいていの理論は、個人の態度とは、基本的には、対象についての信念と関連する感情の平均量の関数である、と予測する。このように Fishbein は、態度構造と変容を「認知的総和」の過程としてとらえるのに対して、一貫性概念に基づく研究者達は、態度構造と変容を「認知的バランス」の過程としてとらえる。このように「認知的総和」と「認知的バランス」の理論的差違に加えて、態度形成、印象形成における刺激の連合ルールとして、「付加 (adding)」対「平均 (averaging)」の問題が存在する。(Anderson<sup>8,9)</sup>) Fishbein と Hunter<sup>29)</sup> は

総和(付加)理論とバランス(平均)理論とを比較するために表3のような仮説的状况に基づいて両理論の検証実験を行なっている。

表 3

総和理論とバランス理論との間の差違のいくらかを示すための仮設的な例

ある対象(たとえば Mr. A)に関する信念とそれら信念の評価的な側面, learned by:					
グループⅠ		グループⅡ		グループⅢ	
信念	ai	信念	ai	信念	ai
Mr. A is Honest	+3	Mr. A is Honest	+3	Mr. A is Honest	+3
		Loyal	+2	Loyal	+2
				Successful	+1
				Determined	+0.5
$\Sigma Ai = +3$		$\Sigma Ai = +5$		$\Sigma Ai = +6.5$	
$\Sigma Ai/N = +3$		$\Sigma Ai/N = +2.5$		$\Sigma Ai/N = +1.6$	

(Fishbein と Hunter. 29, p. 506)

表3で見られるように、総和理論の観点からでは、個人が対象(刺激人物 Mr. A)について習得するそれぞれの肯定的な情報は、その対象に対する態度の好意度を増加させるように作用する。しかしながら、バランス理論の観点に立つと、ある条件下では、新しい肯定的な情報を習得することは、実際、個人の態度を低くするように働く、と予測できる。一方、否定的に評価された情報の場合にも同様である。すなわち、バランス理論によると、ある条件下では、対象に関して新しい否定的な情報を学ぶことは、その対象に対する個人の態度を増加するように働く、と予測する。これに対して、総和理論は常に、新しい否定的な情報を学ぶということは、個人の態度を減らすように働く、と予測する。こうした仮説を検証するために Fishbein と Hunter<sup>29)</sup> は、表3に示された状況と同一のものを実験的に作った。被験者は最初一連の形容詞をそれぞれ評定し、つぎに刺激人物 Mr. A) を評価した。刺激人物は、異なった数(1, 2, 4, 8)の肯定的な形容詞でもって修飾されていた。最初の評価に基づく形容詞の平均評価を吟味すると、刺激人物を修飾している形容詞の数が増加するとともに、その平均量は有意に低くな

る傾向はみられなかった。しかしながら、総和理論の観点と一致して、刺激人物の評価は、修飾された形容詞の数が増加するにつれて、有意に増加した。このようにこれらの結果は、総和理論の解釈を強く支持した。

Anderson と Fishbein<sup>5)</sup> は、実験的に記述された刺激人物の評価に関連する研究を報告している。この研究の目的として、第一に、態度変容とは、態度対象についての個人の信念それぞれに関連する感情の全体量の関数であるという仮説を検証すること、第二に、Fishbein の総和理論に基づく予測式と Osgood と Tannenbaum の適合性理論に基づく予測式の間質的な比較を行なうこと、第三に、Osgood<sup>6)</sup> によって新しく拡張された適合性理論の予測式と Triandis と Fishbein<sup>9)</sup> によって拡張された適合性理論の予測式との質的な比較を行なうことである。第一の目的と関連して、Fishbein と Hunter<sup>29)</sup> によってすでに同様の研究が行なわれているが、信念の強さ(B<sub>i</sub>)については考慮が払われなかった。この Anderson と Fishbein<sup>5)</sup> の研究においては、信念の強さ(B<sub>i</sub>)が実験条件の中に挿入され、結果は同じく総和理論を支持した。しかしながら、このような結果は「付加」対「平均」との間の差異を示しているだけであって、実際には、総和理論とバランス理論の妥当性ないし有用性については何も示していない。この二つの相争っている理論を比較するためには、はっきりと異なった質的な予測がそれぞれの理論によって行なわれなければならない。不幸にも、バランス理論の中では、Osgood と Tannenbaum の適合性理論を除いては、数量的に扱える理論はない。その点適合性理論は、態度を予測しうることが可能なように公式化されている。Triandis と Fishbein<sup>9)</sup> によって拡張された適合性理論のモデル式を一般化した形で示すとつぎようになる。

$$\text{予測される態度} = \frac{\left[ \sum_{i=1}^N |a_i| (a_i) \right] + |a_n| (a_n)}{\left[ \sum_{i=1}^N |a_i| \right] + |a_n|}$$

|a<sub>i</sub>| = 形容詞 “i” についての評価の絶対値  
 (a<sub>i</sub>) = 形容詞 “i” についての代数的評価

$|a_n|$  = 名詞についての評価の絶対値

$(a_n)$  = 名詞についての代数的評価

$N$  = 名詞と関連する形容詞の数

このように適合性理論によると、本質的には、複雑な刺激に対する個人の態度を、その要素の部分評価の重みづけられた平均としてみる。これに反して Fishbein の理論 ( $\sum B_i a_i$ ) によると、複雑な刺激に対する個人の態度は、その要素の部分評価の重みづけられた信念総和としてみる事ができる。

一方 Osgood<sup>61)</sup> によって拡張された 適合性理論のモデル式を示すとつぎのようになる。

$$\text{予測される態度} = \frac{|a_i|(a_i) + |a_{ni-1}|(a_{ni-1})}{|a_i| + |a_{ni-1}|}$$

$|a_i|$  と  $(a_i)$  =  $i$  番目の形容詞についての絶対値の評価と代数的評価

$|a_{ni-1}|$  と  $(a_{ni-1})$  =

$i-1$  番目の形容詞によって修飾された名詞についての絶対値の評価と代数的評価

実験の結果によると、刺激人物について実際得られた評価は、二つの適合性理論に基づく相関 (+.38, +.39) よりも、Fishbein のモデル式の予測と有意に相関 (+.66) した。

Anderson と Hackman<sup>6)</sup> による研究は、態度対象に「現実の生活」でよく知られた人 (被験者の course instructor) を用いて、やはり総和理論を支持している。

おわりに

昨今のアメリカにおける態度研究、なかでも態度構造に関する研究は目ざましいものがある。これらについては既に、わが国においても紹介されてはいるが、部分的、断片的に行なわれるか、また、態度研究という側面よりは、認知理論として扱われることが多かったといっても誤りはない。

また、近年、その勢力的な研究でもって名の高い Fishbein の総和理論もまだ十分な紹介は行なわれていない。

この小論が、不十分さをかえりみず、態度構造論から一貫性理論と総和理論の概観を試みた理由はそこにある。さらに、僅かばかりであるがこの

両理論の比較検討をも加えた。既にこうした観点から筆者らは、適合性理論と総和理論の数学的モデルの比較検討、と題する実験研究 (日本教育心理学会 11 回発表論文集, 1969, PP. 354-355) をも発表した。ここではそれらについてはすべて割愛した。アメリカのそれに比べ、停滞を続けるわが国の態度に関する理論的研究の進展を望んでやまない。大方の御批判を期待している。

【参考文献】

1. Abelson, R. P., Modes of resolution of belief dilemmas. *J. conflict Resol.*, 1959, 3, 343—352.
2. Abelson, R. P., and Rosenberg, M. J., Symbolic psycho-logic : a model of attitudinal cognition. *Behav. Sci.*, 1958, 3, 1—13.
3. 鮑戸弘, 均衡の理論と変革の理論 (その1) サンケイ・アド・マンスリー, 1964, 21, 58—62.
4. 鮑戸弘, 態度構造研究の方法論に関する諸問題, 要因分析との関連を中心に, *心理学評論*, 1965, 9, 267—288.
5. Anderson, L. R., and Fishbein, M., Prediction of attitude from the number, strength, and evaluative aspects of beliefs about the attitude object. *J. Pers. soc. Psychol.*, 1965, 2, 437—443.
6. Anderson, L. R., and Hackman, J. R., Further comparisons of summation and congruity theories in the prediction of attitude structure. *J. Psychol. Stud.*, 1967, 15, 49—56.
7. Anderson, L. R., A comparison of the efficacy of three models of attitude change in predicting negative attitude. *J. soc Psychol.*, (in press)
8. Anderson, N. H., Application of an additive model to impression formation. *Science*, 1962, 138, 817—818.
9. Anderson, N. H., Averaging versus adding as a stimulus-combination rule in impression formation. *J. exp. Psychol.*, 1965, 70, 394—400.
10. Backman, C. W., and Secord, P. F., The effect of perceived liking on interpersonal attraction. *Hum. Relat.*, 1959, 12, 379—38

- 4.
11. Burdick, H. A., and Burnes, A. J., A test of "strain toward symmetry" theories. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1958, 57, 367—370.
12. Carlson, H. B., Attitudes of undergraduate students, *J. soc. Psychol.*, 1934, 5, 202—212.
13. Carlson, E. R., Attitude change through modification of attitude structure. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1956, 52, 256—261.
14. Cartwright, D., Some principles of mass persuasion. *Hum. Relat.*, 1949, 2, 253—267.
15. Cartwright, D. and Harary, F., Structural balance : a generalization of Heider's theory. *Psychol. Rev.*, 1956, 63, 277—293.
16. Di Vesta, F., and Merwin, J., The effects of need-oriented communications on attitude change. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1960, 60, 80—85.
17. Eysenck, H. J., *The psychology of politics*, London : Routledge & Kegan Paul, 1954.
18. Ferguson, L. W., The isolation and measurement of nationalism, *J. soc. Psychol.*, 1942, 16, 218—228.
19. Festinger, L., Informal social communication. *Psychol. Rev.*, 1950, 57, 271—282.
20. Festinger, L., Theory of social comparison processes. *Hum. Relat.*, 1954, 7, 117—140.
21. Festinger, L., A theory of cognitive dissonance, 1957, (末永俊郎監訳「認知的不協和の理論」誠信書房, 1965)
22. Fishbein, M., A theoretical and empirical investigation of the relationships between beliefs about an object and the attitude toward the object. Unpublished doctoral dissertation, University of California, Los Angeles, 1961.
23. Fishbein, M., An investigation of the relationships between beliefs about an object and the attitude toward that object, *Hum. Relat.*, 1963, 16, 233—239.
24. Fishbein, M., A consideration of beliefs, attitudes and their relationships. In I. D. Steiner and M. Fishbein (Eds.) *Current studies in social psychology*, New York : Holt, Rinehart and Winton, 1965, pp. 107—120.
25. Fishbein, M., A consideration of beliefs and their role in attitude measurement. In M. Fishbein (Ed.) *Readings in attitude theory and measurement*. New York : John, Wiley and Sons, 1967, pp. 257—266.
26. Fishbein, M., A behavior theory approach to the relations between beliefs about an object and the attitude toward the object, In M. Fishbein (Ed) *Readings in attitude theory and measurement*, New York : John, Wiley and Sons, 1967, pp. 389—400.
27. Fishbein, M., Attitude and the prediction of behavior. In M. Fishbein (Ed.) *Readings in attitude theory and measurement*. New York : John, Wily and Sons, 1967, pp. 477—492.
28. Fishbein, M. and Raven. B. H., The A B scales : An operational definition of belief and attitude. *Hum. Relat.*, 1962, 15, 35—44.
29. Fishbein, M. and Hunter, R., Summation versus balance in attitude, organization and change *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1964, 69, 505—510.
30. 藤野武, 岡路市郎, 福島正治, 社会的態度の因子分析的研究, 北海道学芸大学紀要, 1953, 4, No. 2, 1—33.
31. 原岡一馬, 態度変容に関する実験的研究 — 積極的参加度が態度変容 および その過程に及ぼす影響 — 教育・社会心理学研究, 1963, 4, 77—91.
32. 原岡一馬, 態度変容過程に関する研究, 年報社会心理学, 第6号, 勁草書房, 1966.
33. Harary, F., Norman, R.Z. and Cartwright, D., *Structural models : an introduction to the theory of directed graphs*. New York : Wiley, 1965.
34. Heider, F., Attitude and cognitive organization. *J. Psychol.*, 1946, 21, 107—112.
35. Heider, F., *The psychology of interpersonal relations*, New York : Wiley, 1958.
36. Insko, C. A., *Theories of attitude change*, New York : Appleton, Century-Crofts. 1967.
37. Izard, C. E., Personality similarity, positive

- affect, and interpersonal attraction. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1960, 61, 484—485.
38. Janichi, W. P., Effect of disposition on resolution of incongruity. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1964, 69, 579—584.
  39. Jordan, N., Behavioral forces that are a function of attitudes and of cognitive organization. *Hum. Relat.*, 1953, 6, 273—287.
  40. Katz, D., and Stotland, E., A preliminary statement to a theory of attitude structure and change, In S. Koch (Ed.) *Psychology : a study of a science. Vol. 3.* New York : Mc Graw-Hill, 1959, pp. 423—475.
  41. 河村豊次・四方耀子, 社会的態度の発達, 心理学評論, 1960, 4, 146—165.
  42. Kerrick, J. S., The effect of relevant and non-relevant sources on attitude change, *J. soc. Psychol.*, 1958, 47, 15—20.
  43. Kerrick, J. S., News pictures, captions and the point of resolution. *Journ. Quart.*, 1959, 36, 183—188.
  44. Kerrick, J., The effects of instructional set on the measurement of attitude change through communications, *J. soc. Psychol.*, 1961, 53, 113—120.
  45. Krech, D. and Crutchfield, R. S., *Theory and problems of social psychology*, New York : Mc Graw-Hill, 1948.
  46. Krech, D., Crutchfield, R. S., and Ballachey, E. L., *Individual in Society*. New York : McGraw-Hill, 1962.
  47. Levinger, G., and Breedlove, J., Interpersonal attraction and agreement : a study of marriage partners. *J. Pers. soc. Psychol.*, 1966, 3, 367—372.
  48. 松村康平, 板垣葉子, 適応と変革, 誠信書房, 1960.
  49. McGuire, W. J., Cognitive consistency and attitude change, *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1960a, 60, 345—353.
  50. McGuire, W. J., Direct and indirect persuasive effects of dissonance-producing messages. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1960b, 60, 354—358.
  51. McGuire, W. J., A syllogistic analysis of cognitive relationships. In M. J., Rosenberg and C. I. Hovland and (Eds.) *Attitude organization and change*, New Haven : Yale Univer. Press 1960a, pp. 65—111.
  52. McGuire, W. J., Inducing resistance to persuasion, In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*, Vol. 1. New York : Academic Press, 1964, pp. 191—229.
  53. McGuire, W. J., The current status of cognitive consistency theories. In S. Feldman (Ed.) *Cognitive consistency : motivational antecedents and behavioral consequences*, New York : Academic Press, 1966.
  54. Morrissette, J., An experimental study of the theory of structural balance, *Hum. Relat.*, 1958, 11, 239—254.
  55. Newcomb, T. M., An approach to the study of communicative acts, *Psychol. Rev.*, 1953, 60, 393—404.
  56. Newcomb, T. M., The prediction of interpersonal attraction. *Amer. Psychologist*, 11, 575—586
  57. Newcomb, T. M., Individual systems of orientation, In S. Koch (Ed.) *Psychology : a study of a science, Vol. 3. Formulations of the person and the social context*, New York, McGraw-Hill, 1959, pp. 384—422.
  58. Newcomb, T. M., *The acquaintance process*, New York : Holt, Rinehart and Winston, 1961.
  59. Osgood, C. E., Cognitive dynamics in the conduct of human affairs. *Publ. Opin. Quart.*, 1960, 24, 341—356.
  60. Osgood, C. E., An alternative to war or surrender. Urbana : Univer. of Illinois Press. 1962 (田中靖政, 南博訳, 「戦争と平和の心理学」, 岩波書店, 1968)
  61. Osgood, C. E., An understanding and creating sentences, *Amer. Psychologist*, 1963, 18, 735—751.
  62. Osgood, C. E., Suci, G. J., and Tannenbaum, P. H., *The measurement of meaning*, Urbana : Univer. of Illinois Press, 1957.
  63. Osgood, C. E. and Tannenbaum, P. H., The principle of congruity in the prediction of attitude change, *Psychol. Rev.*, 1955, 62, 42—55.
  64. Peak, H., Attitude and motivation,, In M. Jones

- (Ed.), Nebraska symposium on motivation, Lincoln: Univer. of Nebraska Press, 1955, 3, 149—188.
65. Price, K. Q., Harburg, E., and Mcleod, J. M., Positive and negative affect as a function of perceived discrepancy in A B X situations, *Hum. Relat.*, 1965, 18, 87—100.
66. Price, K. Q., Harburg, E., and Newcomb, T. M., Psychological balance in situations of negative interpersonal attitudes, *J. Pers. soc. Psychol.*, 1966, 3, 265—270.
67. Rokeach, M. (Ed.) *The open and closed mind*, New York: Basic Books, 1960.
68. Rokeach, M., and Rothman, G., The principle of belief congruence and the congruity principle as models of cognitive interaction, *Psychol. Rev.*, 1965, 72, 128—172.
69. Rokeach, M., Smith, P., and Evans, R. I., Two kinds of prejudice or one? In M. Rokeach (Ed.), *The open and closed mind.*, New York: Basic Books, 1960, pp. 132—168.
70. Rokeach, M., *Beliefs attitudes and values*. Jossey-Bass, 1968.
71. Rosenberg, M. J., *The experimental investigation of a value theory of attitude structure.* Unpublished doctoral dissertation, Univ. of Michigan, 1953.
72. Rosenberg, M. J., Cognitive structure and attitudinal affect, *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1956, 53, 367—372.
73. Rosenberg, M. J., An analysis of affective-cognitive consistency, In M. J. Rosenberg and C. I. Hovland (Eds.) *Attitude organization and change*, New Haven: Yale Univer. Press. 1960a, pp. 15—64.
74. Rosenberg, M. J., Cognitive reorganization in response to the hypnotic reversal of attitudinal affect, *J. Pers.*, 1960b, 39—63.
75. Rosenberg, M. J., A structural theory of attitudinal dynamics, *Publ. Opin. Quart.*, 1960c, 24, 319—340.
76. Rosenberg, M. J., Some content determinants of intolerance for attitudinal inconsistency, In S. Tomkins and C. Izard (Eds.), *Affect, cognition and personality*, New York: Springer Publishing Company, 1965, pp. 130—147.
77. Rosenberg, M. J. and Abelson, R. P., An analysis of cognitive balancing, In M. J., Rosenberg and C. I. Hovland (Eds.) *Attitude organization and change*, New Haven: Yale Univer. Press, 1960, pp. 112—163.
78. Rosenberg, M. J. and Hovland, C. I., Cognitive, affective and behavioral components of attitude, In M. J. Rosenberg and C. I. Hovland (Eds.) *Attitude organization and change*, New Haven: Yale Univer. Press, 1960, pp. 1—14.
79. Rosenberg, S., Mathematical models of social behavior, In G. Lindzey and E. Aronson (Eds.) *Handbook of social psychology*, Vol. I 2nd edition, Cambridge: Addison-Wesley, 1968, pp. 179—244.
80. Sampson, E. E., and Insko, C. E., Cognitive consistency and performance in the auto-kinetic situation, *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1964, 68, 184—192.
81. Sanai, M., An experimental study of social attitudes, *J. soc. Psychol.*, 1951, 34, 235—264.
82. 瀬谷正敏, 対人認知と対人関係の認知, *年報社会心理学*, 第4号, 勁草書房, 1963, pp. 107—116.
83. 瀬谷正敏, 態度変化とバランス説, 干輪浩先生 古稀記念心理学論集, 誠信書房, 1965, pp. 65—77.
84. Smith, M. B., Personal values as determinants of a political attitude. *J. Psychol.*, 1949, 28, 477—486.
85. Stachowiak, J. G., and Moss, C. S., Hypnotic alteration of social attitudes. *J. Pers. soc. Psychol.*, 1965, 2, 77—83.
86. Steiner, I. D., Sex differences in the resolution of A-B-X conflicts, *J. Pers.*, 1960, 28, 118—128.
87. 田中国夫, 日本人の社会的態度, 誠信書房, 1964.
88. Tannenbaum, P. H., Initial attitude toward source and concept as factors in attitude change through communication, *Publ. Opin. Quart.*, 1956, 20, 413—425.
89. Tannenbaum, P. H., Mediated generalization of attitude change via the principle of

- congruity, *J. Pers. soc. Psychol.*, 1966, 3, 493—500.
90. Tannenbaum, P. H., and Gengel, R. W., Generalization of attitude change through congruity principle relationships, *J. pers. soc. Psychol.*, 1966, 3, 299—304.
91. Thurstone, L. L. The vectors of mind, *Psychol. Rev.*, 1934, 41, 1—32.
92. Triandis, H. C., and Fishbein, M., Cognitive interaction in person perception, *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1963, 67, 446—453.
93. Zajonc, R. B., The concepts of balance, congruity and dissonance, *Publ. Opin. Quart.*, 1960, 24, 280—296.
94. Woodruff, H., and Di Vesta, F., The relationship between values, concepts and attitude, *Educ. psychol. Measmt.*, 1948, 8, 645—660.